

研究ノート

「保管費」について

——流通費の研究(一)——

井田喜久治

ま え が き

第一節 安部隆一氏の「利用効果」生産説

第二節 橋本勲氏の「利用効果」生産説

第三節 「保管費」の本質

ま え が き

エンゲルスは『資本論』英語版への序言および第二巻への序言のなかで、第二巻についてそれぞれ、つぎのようにいつてゐる。

「……第一部は、大きな程度において、それ自身で一全体をなすものであり、また二十年らい、独立の著作と看なされてきた。私が一八八五年にドイツ語で出版した第二部は、一八八七

「保管費」について

年以前には公刊されえない第三部なしには決定的に不完全である」(『資本論』、インステイトウト版、第一巻、二七ページ、長谷部訳、青木文庫版、第一分冊、九八ページ)。

「この第二部の光彩陸離たる諸研究と、前人未踏の領域での第二部のまったく新たな諸成果とは、第三部……の内容に対する前置きにすぎない」(『資本論』、インステイトウト版、第二巻、一九ページ、長谷部訳、青木文庫版、第五分冊、三二ページ)。

(1) この小論における『資本論』からの引用は主としてこの第五分冊に限定されているので、以下においてはページ数の指示のみにとどめる。

ここでエンゲルスは、第二巻の第三巻にたいする意義を説明しているのであるが、他方、剰余価値の生産および資本そのものの生産を分析し、資本関係の生成、発展および消滅の必然性をあきらかにした第一巻『資本の生産過程』にたいして、第二巻においては『資本の流通過程』が分析されている。ここでは階級関係のあらたな分析はおこなわれていないということができる。この小論において考察する「流通費」をふくむ第一篇についてこのことをみれば、第一篇は以下の諸篇にたいしていわば前置きをなし、形態諸規定の分析を主たる内容としているのである。

たとえば、マルクスは、第一巻の叙述にもとづいて、資本の循環過程を貨幣資本の循環として三つの段階においてしめしつつ、第二巻第一篇「資本の姿態変換とその循環」の研究対象に

「保管費」について

ついで、つぎのようにいつている。

「第一段階および第三段階は、第一部では、第二段階すなわち資本の生産過程の理解に必要なかぎりでのみ論究された。だから、資本がその種々の段階で着用する——そして資本が循環の反復にさいし時には着け時には脱ぐ——諸形態は、顧慮しないでおかれた。これらの形態がいまや研究のさしあたった対象をなす」(『資本論』、インステイトウト版、第二巻、二三ページ、訳、三八ページ)。

これまでの『資本論』研究をふりかえってみると、第一巻および第三巻の研究にたいして、こうした形態諸規定の分析は比較的理論的考察の対象とされることがすくなかったように考えられる。しかるに最近、「流通費」にかんする理論的研究が⁽²⁾つぎつぎに発表されるにいたった。第二巻第一篇第六章第二節「保管費」および第三節「運輸費」にかんする諸研究がそれぞれある。

(2) 参考までに筆者の目にふれた関係諸論文をつぎにかかげておく。

佐藤光威「交通用役の経済学的考察」中央大学経済・商業学会「経商論纂」第四四号所収、昭和二十七年六月刊。

江原又七郎「流通諸費用の価値形成並に平均利潤率の形成への参加について」宇都宮大学文学部「研究論集」第二号所収、昭和二十七年十一月刊。

伊藤岩「地代・流通費—マルクス価値論の一考察—」新潟大学人文学部「新潟大学法経論集」第三巻第二号所収、昭和二十九年

三月刊。

石井彰次郎「交通生産説についての一考察」和歌山大学経済学会「経済理論」第二七号所収、昭和三十年九月刊。

石井彰次郎「サーヴィスと生産及び国民所得—運送サーヴィスを中心として—」和歌山大学経済学会「経済理論」第三三号および第三四号所収、昭和三十一年九月および十一月刊。

橋本勲「保管費用と運送費用—安部教授および通説に対する一批判—」香川大学経済研究所「香川大学経済論叢」第二十九巻第四号所収、昭和三十一年十一月刊。

富永祐治「交通用役について」大阪市立大学経済研究会「経済学雑誌」第三十七巻第四号所収、昭和三十二年十月刊。

中西健一「マルクスにおける交通—生産説の二つの根拠—交通生産説論争によせて—」大阪市立大学経済研究会「経済学雑誌」第三十七巻第四号所収、昭和三十二年十月刊。

茂木六郎「保管費用と運輸費用に関する一考察(一)—使用価値論に關説する—」長崎大学経済学部産業経営研究所「経営と経済」第三十七年第三号所収、昭和三十一年十一月刊。

石井彰次郎「交通生産説ノート」和歌山大学経済学会「経済理論」第四二号所収、昭和三十三年三月刊。

茂木六郎「保管費用と運輸費用に関する一考察(二)—使用価値論に關説する—」長崎大学経済経営学会「経営と経済」第三十八年第二号所収、昭和三十三年十月刊。

茂木六郎「保管費用と運輸費用に関する一考察(三)—使用価値論に關説する—」長崎大学経済学部研究会「経営と経済」第三十九年第四号所収、昭和三十五年六月刊。

これら二種の「流通費」は、それが「流通費」たるかぎりその諸規定を共通にするのであるが、しかし、必らずしもその本性において全く同一とすることができない側面をもつと考えられる。「純粋な流通費」と「保管費」および「運輸費」とが全く本性を異にすることについてはおそらく異論はないであろう。これにたいして、「保管費」および「運輸費」を「流通費」として考察するばあい、その本質把握において相容れない諸見解が提出されている。しかも、これらの諸見解はたんに相容れないのみならず、理論的にみて検討する余地のあるいろいろの問題点をふくんでいるように思われる。そこでわたくしは、これらの諸見解のうち二つの見解についてその主要な諸論点を簡単に検討し、この検討を通じてさしあたり「保管費」にかなする正しい理解にたつしたいと考えている。

検討の対象とした見解の一つは、安部隆一氏が、その論稿「保管費用」のなかで展開している見解である（安部隆一著「流通諸費用の経済学的研究」所収、昭和二十二年、伊藤書店刊、以下、安部氏、前掲書、と略称）。さらに、「流通費」にかなする理論的研究が最近発表されるにいたったといったが、それは、一般的な事態を指摘したのであって、この種の研究がかつて皆無であったことを主張したものでなかったことはいうまでもない。この安部氏の労作は、数少ない諸成果のうちすぐれた先駆的業績の一つであったといえる。このことは、「流通費」にかなする最近の諸研究のほとんどすべてが、なんらかのかたちで安部

「保管費」について

氏のこの研究に言及せざるをえないことによっても自らあきらかである。それにもかかわらず、わたくしがあえてこの労作を検討の対象としてとりあげた理由は、それがこのようにすぐれた業績であることを十分に認めながらも、そこになお検討を必要とする若干の問題点をも同時に認めざるをえなかったからである。理由はそればかりではない。安部氏の見解の不充分さを批判克服し、もって「流通費」のあらたな理論的發展をこころみたその後の諸研究が、多かれ少なかれ、安部氏のこの若干の問題点にわざわざいわれてその本来の意図をはたしえないと考えられる事態をみると、安部氏の見解にたいする適切な批判の必要性を一そう強く認めたからでもある。

検討の対象とした見解の他の一つは、橋本勲氏が、その論稿（註②参照）「保管費用と運輸費用——安部教授および通説に對する一批判——」のなかで展開している見解である（以下、橋本氏、前掲論文、と略称）。この橋本氏の労作は、副題によってもあきらかなごとく、この小論においてわたくしが検討する安部氏の同じ労作の批判ならびにその批判にもとづく「保管費」および「運輸費」の本質究明をこころみたものである。これは、さきに述べたわたくしの意図とまさに軌を一にするものである。しかるに、橋本氏がこの論稿のなかで展開している見解には納得しえない重大な問題点がふくまれていると考えられるのである。換言すれば、橋本氏の安部氏にたいする批判は、その意図にもかかわらず、そもそも問題をふくむ結果になってい

「保管費」について

一六八

るようである。さらに、橋本氏の見解を検討の対象としてとりあげた他の一つの理由は、最近発表されている「運輸費」にかんする数多くの研究(註②参照)のなかに一般的にあらわれている誤った理解、とわたくしには考えられる理解、すなわち、「流通費」のうち「保管費」と「運輸費」とは全く同一の本性をもつ「流通費」であることを当然の前提として、このことについてはなんら立ちいった説明を与えていない理解、がこの橋本氏の「保管費」にかんする研究にもきわめて明瞭にあらわれていると考えられたからでもある。かくして、橋本氏の労作にたいする検討は、橋本氏の安部氏にたいする批判そのものを検討する部分および橋本氏自身の見解そのものを検討する部分の二つの部分にわかれることになる。

一 安部隆一氏の「利用効果」生産説

(一)

氏は「保管費」の考察にさきだち、「保管費」が「純粋な流通費」と本性を異にし、したがってその生産的性格が流通形態によって隠蔽されている生産過程に起因しうる流通費であることを認めて、つぎのようにいっている。

「……保管費用は、等しく流通費用ではあるが、売買費用とは異なる。先ず第一にそれは同一価値を商品形態から貨幣形態に転化するために、換言すれば、社会的生産の商品形態のためにのみ支出されるのではない。商品生産の形態をとらない社会的生産においても、

生産物が生産過程を離れて消費過程にいきこむまでは、貯蔵品を形成し、しかしてその保管のために費用が支出されねばならない。この点において、保管費用は売買費用と異なる。第二に、右と絡んで、売買費用は商品価値の形態にのみ関係し、商品の価値・使用価値そのものには、何らの関係もないに反し、保管費用は商品の価値・使用価値そのものに關係し、使用価値のうちに存在し従って使用価値の保存によってのみ保存される価値を保存するために支出される。それで保管費用は、売買費用と異なり、運送費用とともに、流通部門に延長されるに過ぎざる従つて流通形態のためにその生産的性質を隠蔽されるに過ぎざる生産過程から生じ得るものとされている」(安部氏、前掲書、三五—三六ページ)。

「保管費」を「純粋な流通費」から区別する独自性として氏がここに列挙する二点は、「保管費」の本質把握における重要な論点をなすものと考えられる。しかしながら、この「第一」の説明と「第二」の説明とは、全く別個の観点のもとに論ぜられるべき性質の二つの問題である。したがって、これら二点にもとずいて「保管費用は、生産過程から生じ得るものだ」とされている」と結論する氏の見解には疑問をいだかざるをえない。つまり「第一」の説明は、「保管費」が商品の価値に入りこむかどうか、という問題に関連する。他方、「第二」の説明が、これのみが「保管費」を生産過程から生じうる費用と規定する根拠にふれるものと考えられる。したがって、氏の結論は「第二」の説明からのみひきだされうるし、またひきだされな

ければならない。このように重大な問題をふくむとはいへ、さきに指摘したとおり、これら二つの説明はいずれも「保管費」の考察における重要な論点をなす。したがって、「保管費」分析の手がかりはまさにここに求められるべきであると考えられるにもかかわらず、氏はひるがえってつぎのように問題を提起し、この観点から「俗説」を批判するのである。

「それ故に保管費用の経済学的性質の問題は、それが如何なる意味において生産的であるかという問題に、要約することができ。そこで以下の問題は、保管費用が、……流通費用でありながら、生産費用であるのは如何なる根拠に基くのであるか、……ということになる」(安部氏、前掲書、三六ページ)。

氏が「俗説」とする見解は、つぎのとおりである。

「保管費用は、生産物としての使用価値としての商品のうちに存在し従つて生産物(使用価値)そのものの保存によつて保存される価値の、保存を目的として支出される。使用価値はこの場合増加することなく、従つて価値は高まることなく、却つて減少するのであるが、この減少が保管によつて制限される。それでこの範囲で使用価値・価値が謂わば生産され、かくて保管費用は生産的である」(安部氏、前掲書、三七ページ)。

この見解は「使用価値そのものの保存」を指摘するかぎり、さきに引用した氏の「第二」の説明と全く同一の観点にもとずいている。したがって、氏の観点からみて「俗説」とは異なる「説」と考えられるのであるが、氏は、これを「俗説」として、さしあたりつぎのようにいっている。

「保管費」について

「貯蔵商品には、一方に、総じて社会的生産の総過程において必然に形成されるものと、他方に、再生産過程そのものとは関係なく、単に流通の停滞より形成されるものがあって、この両者は峻別されねばならない。……この両者はともに、……流通の停滞としてあらわれ、従つてこの二つの資格が貯蔵品そのものにおいて区別し難く絡み合うのであるが、しかしこれらを混淆することは許されない。しかるに、使用価値(＝価値)減少の制限なる意味においては、保管費用は、この二つの資格における貯蔵品一般について成立するのである。それ故にこの説に従えば、保管費用一般が生産費用であるといわねばならなくなる」(安部氏、前掲書、三七―三八ページ)。

商品在荷について、在荷形成の根拠にもとずき「二つの資格」を「峻別」することは、そのかぎりではもちろん正しい。しかし、この「峻別」が当面の考察にとってどれほどの意義をもちうるかについては、ただちには賛成しがたい問題をふくむものと考えられる。したがって、このことはのちの課題とし、ここではさしあたりつぎのことを指摘しなければならぬ。

すなわち、右の引用にもあるごとく、この「俗説」から当然ひきだされる結論——「保管費用一般が生産費用である」という結論にたいして、氏は、否定的な態度をとっている。だが、氏のこの態度は、かえって氏にとっては困った結果を生ぜしめるのではなからうか？ さきに述べたごとく、この「俗説」が「使用価値そのものの保存」を指摘するかぎり、氏が冒頭で列挙した「第二」の説明とその観点を一にし、したがって、氏の

「第二」の説明からもまた氏が否定しようとしている同じ結論——「保管費用一般が生産費用である」という結論がこれまた当然ひきだされるからである。かくて客観的にみれば、氏は、「俗説」批判を通じて自己自身を「止揚」するにいたったといわなければならない。

以下、まず、氏の詳細な「俗説」批判からみていくことにしよう。

(一)

すでに引用したごとく、氏は、「保管費用が、生産費用であるのは如何なる根拠に基づくのであるか」という問題意識にもとずき、全く性質を異にする二種の商品在荷と「保管費」との関係についてそれぞれ考察し、同時にさきの見解が「俗説」とされる理由をつぎのごとく説明している。

(1) 生産の独自の性格から生ずる商品在荷と「保管費」との関連にかんする氏の説明

「生産費用たるためには、……それによつて価値が附加され増殖されねばならない。対象化された労働のみに費用が投ぜられれば、その消耗部分の価値が移転され、さらに労働力が流動せしめられれば増殖価値がつくれねばならない。」

しかるに単に流通の停滞より形成される貯蔵品に投ぜられる保管費用は、その商品価格を決して増加せしめない。たとえば資本家Aが商品を一年間販売し得ずに……もつていて、そのために……保管費用を投じた場合に、之を販売しようとするれば、購買者は次の如く

いうであらう。他の資本家Bのもとには、昨日生産したばかりの同じ商品がある。しかるにAの商品は……多分時間の経過によつて損傷しているであらう。それ故にAから購買するとすれば、Bからするよりも安価に引取らねばならぬ。と。また、資本家が故意にその商品を市場に出さず、価格変動をまつ場合にあつても、かれが保管費用を実現しうるかどうかは、価格変動が起るかどうにかかつていて、しかも価格変動はかれの保管費用の結果起るものではない。保管費用はかくて商品価値を増加せしめない。

それ故に保管費用が……単なる販売の停滞にのみ起因する場合には、さらに換言すれば、生産過程の一定の社会形態……に起因するかぎりでは、それは生産費用たり得ないといわねばならぬ。

しかるに上説では、このことが無視されて、保管費用一般が生産費用であると主張することとなる。この点において既に誤つている」(安部氏、前掲書、三八—三九ページ)。

ここに引用した氏の説明をつらぬく観点をきわめて明瞭にしめすと考えられる個処を、つぎに簡単に列挙してみよう。

(1) 「生産費用たるためには、それによつて価値が附加され増殖されねばならない。」

この説明が価値生産の問題に関連していることはあきらかである。

(2) 「単に流通の停滞より形成される貯蔵商品に投ぜられる保管費用は、その商品価格を決して増加せしめない。」

この説明は、すでに生産された価値が実現するかどうかの問題に関連しているものと考えられる。

(3)「資本家が故意にその商品を市場に出さず、価格変動をまつ場合にあつても、かれが保管費用を實現しうるかどうかは、価格変動が起るかどうにかかつて……」

この説明も価値生産とはなんのかわりもない。換言すれば、価値生産を前提し、すでに生産された価値が實現するかどうかの問題、つまり(2)の問題に帰着する。

(4)「保管費用はかくて価値を増加せしめない。」

この(4)の結論は、「俗説」批判における氏の観点をしめしてあまりあるようである。氏は、客觀的にみれば、価値が實現されないから価値生産、価値増殖がおこなわれないと主張しているのである。

右の簡単な考察がしめすごとく、(1)と(2)および(3)とはそれぞれ別個に論すべき性質の問題であることはあきらかであろう。しかも、当面の研究対象は(1)の問題でなければならぬ。氏の表現をかりれば、「保管費用を生産費用たらしめる根拠」の究明が問題である。ここにも、この検討のはじめに指摘した問題の混同——「保管費」を生産過程から生じうる費用と規定する根拠の問題と、「保管費」が商品の価値に入りこむかどうか、という問題との混同が一貫してしめされている。そして、この問題の混同は、氏が駆使する「生産費用」の概念の二様の使いわけとして一貫させられている。つまり一方は、保管を価値生産の過程と考え、したがってこの費用を「生産費用」と規定するばあいの「生産費用」である。——(そもそも問題はこの観

点から提起されていた)。——他方は、この費用が特定の条件に規定されて商品のコストを構成し、「商品価格を増加」させるばあいの「生産費用」である。——(提起された問題にたいする解答はこの観点からなされている)。

(ウ) 在荷の商品形態に他ならない商品在荷と「保管費」との関連にかんする氏の説明

「……仮りに一步を譲り、この説は再生産過程において必然形成さるべき貯蔵商品、即ち、所与の規模の社会的生産のもとにおいて、貯蔵商品としては存在せざるとき、潜勢的生産ファンドとしての生産貯蔵品なり或は準備的消費ファンドとしての消費貯蔵品なりとして存在するなるべき貯蔵品の商品形態に他ならぬ貯蔵商品に対して投ぜられる保管費用にのみ妥当するとして考えてみよう。

さきに述べたように、生産費用たるためには、それにより価値が形成され附加されねばならぬが、およそ価値は使用価値との統一において把握されねばならぬ。……然りとすれば、保管費用によつて如何なる使用価値が生産されるのであるか。上説によれば、それによつて減少を制限された使用価値……という他ない。

……かかる見地に立てば、保管費用が生産費用なりや否やは、それにより減少を制限されたる使用価値従つてそれに内在せる価値と、保管のために支出されたる使用価値従つて価値……との差によつて、決定されることになるであらう。前者が後者より以上であるとき(1)か、少くとも等しいとき(2)にのみ、生産費用であつて、前者が後者に不足するとき(3)は、生産費用でないと言わねばならぬ。おそらく事実上は(1)の場合が支配的に多いであらう。しかしそのいず

「保管費」について

れなりやは、算定が殆んど不可能な事実問題に帰着する。もしそれ保管してもなお生ずる使用価値の質的変化・量的減少を考慮に入れるならば、なおさらのことである。かくの如きは理論の放棄に他ならない」(安部氏、前掲書、三九一四〇ページ)。

在荷の商品形態に他ならない商品在荷を「保管費」との関連において考察するばあい、その関連からひきだしうる唯一の問題は、氏がそうされているような使用価値生産の問題ではない。それは、総じて生産の問題ですらなく、この費用が「商品価格を増加」させるかどうか、という問題である。そこには「保管費」を生産過程から生じうる費用と規定する根拠の問題が存在する余地は全くない。氏が強いてとりあげているように、このばあい使用価値生産が問題であるとすれば、このことは、当面問題となつてゐる性質の商品在荷の保管のみならず、さきに(4)において考察した生産の独自の性格から生ずる商品在荷の保管にたいしても一般的に妥当することは氏も認めているとおりである。それゆゑ、氏の主張するように、一方のばあいにのみ「保管費用」によって如何なる使用価値が生産されるのであるか」という問題の提起のしかたは、論理的にみて当をえないものといわなければならない。かくして、「理論の放棄」とまで断罪しながら、なおかつ「俗説」への「譲歩」を固守する氏の立場は、これまたさきの混同に依拠していることはあきらかである。

(4)

右の「俗説」批判につづいて、氏はその見解を積極的に展開しているので、つぎにそれをみていくことにしよう。

「それならば、その(「保管費」―井田)生産的性質はどこにもとめられるか。……保管手段と保管労働をもつて、即ち保管過程によつて、生産されるのは、保管使用価値減少の制限という利用効果そのものである。

……保管労働は、その質的規定において、保管手段の価値を『生産物』たる利用効果に移転せしめながら、量的規定において、自ら形成する新価値をこの利用効果に附加していく。……

かくて、保管費用が、……純粹な流通費用ではなく、生産費用たるの性質をもつてゐるといわれるのは、それが、社会的生産の商品形態にのみ起因せず、また価値の姿態変換にのみ関係するのではないということのほか、この費用によつて使用価値従つて価値減少の制限という利用効果そのものが生産され、而して労働力が流通せしめられればそこに価値増殖が行われるということに、最長の根拠があるのである」(安部氏、前掲書、四九一五二ページ)。

見られるとおり、氏は、保管過程が生産する生産物は「利用効果」であり、この「利用効果」の生産に「保管費」の「生産的性質」の「最長の根拠」を求めている。しかし、このような主張のなかにはいろいろの問題点をふくむように考えられる。つぎにこの問題点の若干について簡単に検討してみよう。

第一に、氏によれば「利用効果」とは、これを内容的にみれば「使用価値の減少を制限する」ことである。この同じ内容のことは、まさしく、氏によつて「批判」されつくしたはずの

「俗説」の中心的内容をなしたものに他ならない。このように氏の「利用効果」とは、よそおいをあらたにした「俗説」に他ならないことができる。

第二に、「利用効果」は、保管過程そのものによって生産される。したがって、保管の対象をなす商品在荷がいかなる事情にもとずいて形成された在荷であるか、ということには全く関係ないことはいうまでもない。すなわち、商品在荷が、在荷の商品形態に他ならないばあいにも、純粹に形態から生ずるばあいにも、ともにこの「利用効果」の生産はおこなわれるのである。そこで、「保管費用一般が生産費用であるといわねばならなくなる」「俗説」にたいして、「この点において既に誤つてゐる」という氏の「俗説」批判は、同時に氏自身の見解にたいして準備された批判でもあったのである。

第三に、「利用効果の生産」について、氏は別の説明のなかで、「保管される商品の存否は問題ではない」(安部氏、前掲書、四一ページ)、といっている。保管とは、商品在荷の保管であつて使用価値の保管をふくむことはいうまでもない。つまり使用価値の維持によつてのみ価値が維持され、かくして商品在荷の保管はその本来の目的をたつすることができるのである。したがつて、「保管される商品の存否は問題ではない」という主張は、同時に、保管される使用価値の存否は問題ではないことも意味することになる。したがつて、「使用価値の減少を制限する」という「利用効果」の内容は、氏の「利用効果」生産説にとつて

はたんなるつけたりにすぎないものといわなければならない。すでにくりかえし述べたごとく、当面の問題はこのことの理解にかかっていると考えられるのであるが、氏は、「利用効果」のための「利用効果」を主張するにいたつてゐる。

第四に、氏は、「それ(「利用効果」——井田)が如何にして生産されたか、従つてまた増殖価値をふくんでいるかどうかは、どうでもよいのである」(安部氏、前掲書、五〇ページ)、ともいつてゐる。生産物の生産は、いかなる生産も労働力と生産手段との結合を前提し、労働力による生産手段の生産的消費をふくんでいる。

この生産は資本制的生産においては価値生産、剰余価値生産としておこなわれることは周知のとおりである。「価値増殖をふくんでいるかどうかは、どうでもよい」資本制的生産はありえない。このことは「利用効果」の生産についても当然に妥当しななければならない。かくして、このことを「どうでもよい」とする「利用効果」の生産とは、想像をこえた無内容な「生産」といわなければならない。

最後に、氏は、「保管費」が「生産費用たるの性質をもつ」理由として、「社会的生産の商品形態にのみ起因するのではない」ということ」をも列挙しているけれども、すでにくりかえし述べたごとく、この点は当面の問題には全く関係ないのである。それは、「保管費用が、生産費用であるのは如何なる根拠に基くのであるか」という問題が解決されてのちにはじめてとりあげるべき問題である。それゆえここにも問題の混同における氏

の「一貫性」をよみとることができるのである。

以上、氏の積極的見解の簡単な検討によってほぼあきらかなように、「俗説」の「誤り」を克服する課題も、「保管費」の本性を正しくとらえる課題も、ともに氏によって正しく解決されたとはいえないようである。氏が、以上にみてきたようななかたで「利用効果」生産説を結論としてひきだすにいたった理由は、マルクスが「純粹な流通費」の考察をおえて「保管費」の考察をはじめにあたつて述べている説明、すなわち、「これから考察する流通費は本性を異にする。この流通費は、生産過程——といっても、流通においてのみつづけられる、つまりその生産的性格が流通形態によって隠蔽されているにすぎない、生産過程——から生じうる」(『資本論』、インステイトウト版、第二卷、一三二ページ、訳、一七七ページ)という説明の内容についての正しい理解の欠如にもとづくものと考えられる。ことに、「生産過程」の概念を保管との関連において理解することがきわめて不十分であったというべきであろう。このことは、氏が、「保管なる生産過程で生産されることの直接の『生産物』……」(安部氏、前掲書、四〇ページ)、あるいは「保管なる生産過程の直接の『生産物』……」(安部氏、前掲書、四一ページ)、といつて保管過程を生産過程として最初から前提している点にあきらかにしめされている。「保管なる生産過程」とはなにか? 保管と生産過程とのこの関連こそまず解決されなければならない問題である。この問題の論究はのちの課題として、つぎに節をあらため

て橋本氏の見解を検討することにしよう。

二 橋本勲氏の「利用効果」生産説

(一)

氏は「保管費」の考察にさきだち、考察の観点をしめすと同時にその成果をいわば先取りして、つぎのようにいっている。

「……流通諸費用にかんする研究を吟味してみると、従来の見解では、……純粹な流通費と、これに対する保管費用と運送費用との相違点……が不当に強調され、後の両費用と本来の生産過程の費用との相違点、曖昧になるという難点があつた。……」

そこで本稿では、先ず第一に、安部隆一教授の『流通諸費用の経済学的研究』に対する私の疑問点を卒直に提出するとともに、第二に、右に並べた保管費用と運送費用の性質にかんする問題を、使用価値と価値との二点をめぐつて考察してみたいと思う。結論からいうならば、第一の使用価値については保管費用と運送費用が『使用価値の一変種』を生み出すという見解は誤解を生ずる。両費用は利用効果を生み出すが、使用価値は生み出さないという点をはつきり理解すべきであると考える。第二に、価値については、両費用が『価値を創造し』『価値増殖をする』というのはゆきすぎである。

この問題については社会的観点と個別的観点とを明白に区別し、社会的観点からは、両費用とも生産物の排除をなし、剰余価値を減少する、という点をはつきりと理解すべきであると考える」(橋本氏、前掲論文、二ページ、傍点—橋本氏)。

氏が「保管費用の問題」を使用価値生産および価値生産の二

面から分析し、それによって「保管費用が生産過程の費用である」という命題についての究明をこころみる態度は正しいものと考えられる。では、つぎにこの正しい観点にたつ氏の分析をみることにしよう。さしあたり、安部氏の見解にたいする「疑問点提示」にせめられた氏の見解をとりあげることにする。⁽¹⁾

(一) 氏はその考察を「保管費用」に限定し、この理由について、つぎのようにいつている。

「……さしあたり従来の代表的研究である安部隆一教授の所説について考察することにしよう。このばあい、運送費用は保管費用と基本的には同じ性質の費用であるので、ここでは運送費用を省くことにし、主として保管費用にかんする叙述を中心にして考察を進めてゆくことにしよう」(橋本氏、前掲論文、三ページ)。

見られるとおり、氏によれば「保管費」の分析は同時に「運輸費」の分析にも妥当するようである。この点わたくしは氏と異なる立場をとつてゐる。換言すれば、「保管費」の分析をもつて「運輸費」の分析にかえるわけにはいかないものと考えられるのである。このことは、この小論につづいて予定されている「運輸費」にかんする考察によつてあきらかにされるであらう。したがつて、この小論ではこのことにはふれず、氏の「保管費用」にかんする見解だけを検討することにした。

まず、氏は、商品在荷をその形成の契機に応じて二種にわけ、それと「保管費」との関連を考察している。すなわち、一方の商品在荷の保管に投じられる費用を「第一種保管費用」と規定し、他方の商品在荷の保管に投じられる費用を「第二種保

管費用」と規定する。そして、安部氏の「俗説」批判にたいして、つぎのようにいつている。

「……このように保管費用を二つに峻別することの重要性は保管費用として投下された労働が商品の価値に入りこむか否かにかかつてゐる。……」

……教授は(安部教授以下同じ井田)……この保管費用の二つの種類を区別され、保管費用が生産的である根拠を『使用価値の減少の制限』ということに求めるならば、兩種の区別が抹殺されてしまふといつて批判されるのである。この批判には異論があるわけではない」(橋本氏、前掲論文、五ページ)。

見られるとおり、安部氏のばあいと全く同じ問題の混同があらかにしめされている。ここでの問題は「保管費用として投下された労働が商品の価値に入りこむか否か」ではなく、まさに「保管費用の生産的性質の論拠」如何でなければならぬ。

「保管費用の問題」を使用価値生産および価値生産の二面から分析する氏の正しい規角は、ここにおいて完全に放棄されたようである。氏はこれにつづいて、安部氏の「利用効果」生産説は、「保管費用一般の生産的性質」を主張する「俗説」の異なつたかたちにおける再現に他ならないことを指摘し、当面の問題をつぎのように解決している。

「それでは保管費用の生産的性質は何によつて説明されるべきであらうか。この利用効果の生産は保管費用の生産的性質を説明する第一の条件ではあるが、これだけでは不十分なのである。そこに第二

「保管費」について

の条件を必要とする。第二の条件とは、利用効果が生産されると同時にその消費が社会にとって生産的におこなわれ価値が追加されるということ、すなわち、商品生産形態の独自の性格にもとづく在荷形成に消費されるのではなくして、社会的に必要な在荷形成に消費されるということであり、この二つの条件が揃わなければならないのである」(橋本氏、前掲論文、六ページ)。

見られるとおり、ここでもさきと同じ問題の混同を指摘しなければならぬ。「第二の条件を必要とする」という説明がこのことを明瞭に示している。この点はもはや検討するまでもないと考えられるので右の指摘でとどめることにしよう。しかし、このばあい奇妙に感ずるのであるが、この結論は、まさに氏が批判した安部氏の見解と全く同じ内容をただとりあげたを異にして述べたにすぎないということである。したがって、なら問題の解決に寄与していないこともまた軌を一にしているものといわなければならない。安部氏は「利用効果」の生産を強調し、他方、「社会的生産の商品形態にのみ起因するのではないということ」、すなわち氏の表現をかりれば、「社会的に必要な在荷形成に消費され、したがって、価値が追加される」ことを従属的契機としていた。これにたいして氏は、逆に、安部氏にとっての従属的契機を強調し反対に前者が強調した契機を前者ほど強調しなかったにすぎない。氏にとっては「社会的に必要な在荷」とは異なる商品在荷の保管をもふくめて、総じて「保管費用の問題」を、使用価値生産および価値生産の観点か

ら分析すること——これこそが問題であったのではなからうか？ 当面、「保管費」が商品価格の構成要素をなすという意味において「生産費用」である、あるいは「生産的性質」をもつ、ということが問題ではない。この点を氏も安部氏と同じく看過し、両者の混同を生ぜしめたといわなければならない。「保管費」は「生産過程から生じうる」という命題、つまり保管と生産過程との関連の正しい把握を欠いたところに以上のごとき混同または誤解の理由があるものと考えられる。かくして、氏による安部氏の見解にたいする「疑問点提示」は、安部氏の見解の裏返し「提示」にすぎないものといわなければならない。

(4)

以上をもつて氏の「第一」の課題をなす安部氏の見解にたいする「疑問点提示」についての検討をおえ、つぎに、氏の「第二」の課題——「保管費用の性質にかんする問題を、使用価値と価値との二点をめぐって考察」する課題に氏とともにとりくむのであるが、さしあたり使用価値の問題からはじめることにしよう。

(イ) 「保管費」と使用価値との関連にかんする氏の説明

この節のはじめの引用に見られるごとく、氏は、「保管費が使用価値は生み出さないという点をはっきり理解すべきであると考え」立場にたつて、保管労働による使用価値の「維持・保存」の事実「保管費」考察の手がかりを求めている江原又

七郎氏の見解（まえがきの註(2)参照、以下、江原氏、前掲論文、と略称）およびすでに周知の利用効果生産説を「吟味」し、この成果にもとずいてその結論をひきだしている。以下、氏による江原氏の見解の検討から順次みることにしよう。

江原氏が、「保管費」を「純粹な流通費」および「運輸費」と區別し、「保管費」について「使用価値を創造することなく価値を創造する。社会的富を追加することなく価値を追加する」（江原氏、前掲論文、四九ページ）と説明しているのにたいして、氏は、つぎのごとくこの説明を全面的に否定するのである。

「……江原教授の理解する保管費用は、運送費用とその性質を異にしている。……この見解では、……運送費用では使用価値が創造され、保管費用では創造されないという『奇妙な創造』がおこなわれている。誤りであることはいうまでもない」（橋本氏、前掲論文、八ページ）。

氏は、江原氏の説明をこのようにはげしく非難しているのであるが、江原氏の見解が何故「いうまでもなく誤りである」かについて、立入った説明を与えようとしなない。氏が、「保管費」と「運輸費」とは「その本性においてはまったく同一である」ことを最初から前提していたことはすでに指摘したとおりである。これに反して、これらの「流通費」の差別性を認めて「保管費」を正しく説明しようとする江原氏の見解にたいして、氏は、この前提を対立させこれをたんにくりかえしているにすぎない。さらに、「諸説の吟味を通じて」氏がひきだしていた周

「保管費」について

知の結論を、マルクスの叙述によってつぎのごとく根拠づけている氏の「奇妙な創造」性を指摘しないわけにはいかない。

「マルクスも明確に保管費用のことを『商品の使用価値を追加することなしに商品を高価にする費用』と呼んでいるのである」（橋本氏、前掲論文、一二ページ）。

ここで氏によって引用された「保管費」にかんするマルクスの叙述を江原氏の見解と比較することによって、この「奇妙な創造」性を明示しておこう。

マルクス・「商品の使用価値を追加することなしに商品を高価にする費用。」

江原氏・「社会的富を追加することなく価値を追加する。」
見られるとおり、マルクスの叙述による氏の「根拠づけ」および氏による江原氏の批判が見当ちがいであることはあきらかである。ここで、もし氏の主張が正しく江原氏の説明が誤りであるならば、マルクスの命題もまた「誤りであることはいうまでもない」であろう。氏が以上のごとき「暴論」をあえて世に問うた理由は、他の諸事情を問わないとすれば、主として、氏が「保管費」と「運輸費」とを「同一視」していることにもとずくものと考えられるである。⁽²⁾

(2) 当面の問題にかんするかぎり、わたくしは基本的には江原氏の見解に同意するものであるが、他方、氏の見解のなかには検討を要する問題点もふくまれているものと考えられる。そこで、以下、「保管費」に関連して問題点の一つを指摘することにしよう。

「保管費」について

一七八

氏はさきの論稿のうち「2 保管費、運輸費等の価値形成と、それらの平均利潤率形成への参加の仕方について」と題する一節のなかで、「保管費」の「さしあつたつての問題点」を「如何なる機能において商品の価値に入りこむのか」（江原氏、前掲論文、四七ページ）と定式化し、これにたいしてつきのごとき解決を与えている。

「保管に要する追加労働（対象化された労働および生きた労働を含めて）は諸商品の使用価値に作用し、これを維持する。……その維持・保存は、使用価値を増大せずしてそれを維持するという機能において、消極的に価値形成に与る。……すなわち、保管のための追加労働は、既成の使用価値を増大しないが、既成の価値に新たな価値を追加する。……かくて商品価値は元来の価値十新たに追加された価値、として高められる。価値は高められたが使用価値は依然として同一であるか、あるいは減少することもあり得る。これは一見矛盾するかのようである。がしかし、かかる労働が加えられなかつたならば減少したであろう使用価値が維持・保存せられたというかぎりにおいて、それは消極的ながらやはり生産物形成に参加した労働であるという意味において、吾々にかかる労働の現実的な追加価値形成作用を認めなければならぬ」（江原氏、前掲論文、四八ページ、傍点—江原氏）。

見られるとおり、ここでは氏自身にとつてのみ問題の解決がなされているのではなからうか？ 何故なら、氏は、「保管費」がすべて「商品の価値に入りこむ」ことを前提し、当面の問題を、それは「如何なる機能において入りこむか」という点に求めて

いた。そして右の引用に見られるとおり、保管労働によつて「使用価値が維持・保存せられたというかぎりにおいて、現実的な追加価値形成作用を認めなければならない」と答えているからである。

しかし、ここでわたくしは、氏の説明にみられる相異なる二つの問題の混同を指摘しなければならない。保管労働の「価値形成作用を認めなければならない」としても、このことによつて同時に「商品価値は元来の価値十新たに追加された価値、として高められる」ことをも当然の結論としてひきだすわけにはいかない。保管労働の価値形成作用を認めることと、そこで形成された価値がどれだけ商品の価値に入りこむか、ということとは二つの異なつた問題であるからである。氏はこのことを看過し、保管労働によつて形成された価値は、また同時にすべて追加価値として商品の価値に入りこむことを認めるにいたつている。この混同はそもそも氏の考察の出発点にこれを求めることができるものと考えられる。氏にとつては、「如何なる機能において商品の価値に入りこむのか、さしあつたつての問題点であつた」。しかし「保管費」の考察にとつては、氏の表現をかりれば、「保管費は如何なる機能において生産過程から生じうる費用であるか、さしあつたつての問題点」でなければならないのである。

では、つきに、「利用効果」生産説にたいする氏の検討はこの問題にかんしてどのようなにたされているであらうか？ 氏は一方で、「問題はこの利用効果をどのように理解するかにかかっている」（橋本氏、前掲論文、九ページ）といつて「利用効果」の生産

そのものを前提している。そして他方で、それを「使用価値の一種」と規定する「従来の通説」に反対して、「利用効果」についてつぎのようにいつている。

「それにしても使用価値の一変化であるというのは、何を根拠としていわれるのであろうか。……」

……この使用価値の一種又は一変化であるというばあい、その根拠を積極的に示されているのは宮永教授である。教授によればその根拠を、保管費用……は使用価値に作用するという点に求められ、作用するという意味は『使用価値の……維持……に直接参加する』というように理解されている。……しかしながら、この論拠は、保管労働……が『使用価値の一変化』を生み出すという理由付けのためにもち出すのではなくて、……の費用が価値を追加出来るばあいの論拠にもつてくるべきではなからうか。というのは、使用価値の……維持……はいずれの社会においても必要なことであり、保管労働がこのようないずれの社会においても必要な使用価値の維持、すなわち本来的在荷の維持に充用されるときには価値を追加……するのである。したがって保管費用……が、投機や販売停滞のように、使用価値の社会的に必要な維持……にかなしないときには、その商品に価値を追加しないのである。だが利用効果そのものは、このように価値を追加しないばあいでも生みだされるのではなからうか。例えば投機のための保管……においては、価値は追加されないが、やはり『使用価値の減少の制限』という利用効果……はやはり生み出されているのである。保管という利用効果が生み出されないといすれば、投機のための商品在荷に支出される第二種保管

「保管費」について

費用をいくら支出してもその商品はすべて腐敗……する……という結果になる(橋本氏、前掲論文、九一一ページ、傍点―橋本氏)。

「利用効果」生産説がこの「利用効果」を「使用価値の一種」と規定している理由は、氏の引用にもあきらかなごとく、それを使用価値との一定の関連においてとらえているからに他ならない。換言すれば、それは、官吏、芸術家、医師等の生みだす「利用効果」とは本質的に異なつて、物質的富の創造に直接かかわることを適切にせめんとする企図にもとづいている。「利用効果」の概念の考察にとつて当面重要なことは、使用価値とのこの一定の関連の正しい把握にあるものと考えられる。「流通費」としての「保管費」が、第二巻『資本の流通過程』において叙述されながらなお生産過程との関連のもとにこれを考察することが要求される理由は、まさしくこの点にかかっているものと考えられる。しかるに氏はこのことを看過して、「使用価値の一変化を主張することは行きすぎ」であると「批判」し、さらに、「この論拠は、価値を追加出来るばあいの論拠にもつてくるべきではなからうか」という「批判的考察」をくわえるのである。このような主張は、見当ちがいの「考察」といわなければならない。そればかりではない。この「考察」には氏の見解における混乱が明示されている。氏は一方で、「使用価値の維持」という「利用効果」が、商品在荷に「価値を追加出来るばあい」も「価値を追加しないばあいでも生みだされる」つまり「投機や販売停滞」にもとずく商品在荷の保管

にさいしてもこの「利用効果」の生産を正しくも承認している。他方で、この「論拠」は、「保管費」が商品在荷に「価値を追加出来るばあいの論拠」とすべきことを主張している。したがって氏は、「保管費」はすべて商品の価値に追加価値として入りこむことを「論証」し、かくして氏は、その「第一種保管費用」と「第二種保管費用」との区別を完全に「止揚」するにいたっているのである。したがって、氏がさきの引用にについて述べている「疑問」は、むしろ、氏の混乱と無理解とにもとずく「疑問」にすぎないものといえることができる。すなわち氏はつぎのようにいつている。

「……保管費用……が、有用効果を生むということは、価値を追加するということの基礎をあたえるものではあるが、それから直ちに保管費用……が使用価値の一種を生み、価値を創造するというように、本来的な生産過程と同一視する考え方の論拠にすることは疑問とされなければならないように思われる」（橋本氏、前掲論文、一ページ）。

(四)「保管費」と価値との関連にかんする氏の説明

以上をもつて氏の使用価値の問題についての見解の検討をおえ、つぎに価値の問題にかんする氏の考察をみることにしよう。この節のはじめの引用に見られるごとく、氏は「保管費」が「価値を創造し」「価値増殖をする」というのはゆきすぎであるという点をはっきりと理解すべきであると考える」立場にたつて、『資本論』および『経済学批判要綱』（以下、『要綱』、と

略称）のうち当面の問題に関連した叙述の「極めて細かい表現の相違」（橋本氏、前掲論文、一五ページ）を問題とし、それについて考察をくわえている。

第一に氏は、『資本論』の「保管費」の叙述における「価値を追加する」というばあいの「追加する」の原語が、『資本論』第一巻『資本の生産過程』の叙述における「新価値を附加する」というばあいの「附加する」の原語と同一であることを確認し、これについてつぎのようにいつている。

「……原文ではなら表現上の差異はみられないのである。したがってこのような表現からみると保管労働……は、何ら本来的生産労働と異ならないようにみえる」（橋本氏、前掲論文、一三ページ、傍点―橋本氏）。

第二に氏は、『要綱』の叙述、すなわち、「流通が価値を創造、することができるとは、流通が直接的生産過程において消費する労働のほかに、新規の使用―他人の労働―を必要とするかぎりにおいてである。このことは、あたかも直接的生産過程において、一層多くの必要労働が使用されるばあいと同じことである。現実的流通諸費用のみは生産物の価値を高める、けれども剰余価値を減少させる」（『要綱』、四四六ページ、傍点は原文の隔字体をしめす―井田）という叙述を引用し、これについてつぎのようにいつている。

「この引用においても、マルクスはあきらかに『生産物の価値を高める……』といつている。以上のようなことから、……保管費用……

を、本来的な生産費用とまったく同一視してよいものであろうか。

そうだとすれば、右の『要綱』からの引用の最後にみられる「けれども剰余価値を減少させる」という一句は果してどのように理解したらよいであろうか。一方では価値を高め他方では剰余価値を減少する、ということは理解しがたい難点である」（橋本氏、前掲論文、一四ページ）。

最後に、『資本論』の「保管費」の叙述、すなわち、「それ（保管費）——井田）は……社会的に考察すれば、労働……の単なる費用・不生産的支出・でありうるが、それ故にこそ個別的資本家にとっては価値形成的に作用し、彼の商品の販売価格への追加分をなしうる」（『資本論』、インスティトゥット版、第二巻、一三一ページ、訳、一七七ページ）という叙述を引用し、これについてつぎのようにいつている。

「ここではあきらかに、本来的生産費用との相違が認められる。『価値を形成する』ではなくして、『個別資本家にとっては価値形成的に作用し』……と表現されている」（橋本氏、前掲論文、一四ページ）。

以上の引用によってあきらかなごとく、氏は、マルクスの叙述や表現の微細な比較検討を通じて氏の見解を「根拠づけ」あわせてそこに見られる「問題点」を「個別資本の観点」および「社会的観点」という二つの「観点」から解決しようところろみているのであるが、さしあたり当面の問題である「個別資本の観点にたつ」氏の解決をみることにしよう。この点について

「保管費」について

氏はつぎのようにいつている。

「……さきにみたように、『価値を追加する』あるいは『高める』と表現されたばあいには、個別資本の観点到立つばあいをいつたように思われる。個別資本の観点到立てば、保管費用も……その商品の価値に『販売価格への追加分』として価値を追加し、価格を高める。……」

……その意味において『価値を追加する』と表現されている。しかしながら『価値を創造する』とか『価値増殖を遂げる』という表現を使っていないことを看過してはならない。……したがって……諸説の如く、……の費用が『価値を創造する』あるいは『価値増殖を遂げる』と理解することは疑問とされなければならないのである」（橋本氏、前掲論文、一四一—一六ページ）。

自己の見解を「根拠づける」ためにたまたま氏がとりあげたマルクスの叙述や表現のなかには、「価値を増殖を創造する」とか「価値増殖を遂げる」という表現が見あたらないことは氏の指摘するとおりである。だが、氏のこのようなとりあげかたはきわめて恣意的といわなければならない。同じ「保管費」の叙述のなかで、マルクスは、「他面、商品の価値がここで維持または増殖される（Andersseits wird der Wert der Waren hier…… konserviert, resp. vermehrt, ……）」（『資本論』、インスティトゥット版、第二巻、一三三ページ、訳、一八〇ページ、ゴシック体——井田）といっている。さらに、さきの『要綱』の叙述のなかでも——なぜか氏はこの表現を「看過」しているようである

「保管費」について

——「流通が価値を創造することができぬ (Wert schaffen kann die Zirkulation……) ……」(ゴシック体—井田)といっているからである。⁽³⁰⁾

(3) 右に見たごとき氏の恣意的な引用のしかたは、『資本論』の「運輸費」にかんするつぎの説明によつても例示することができるのである。氏によれば、「保管費」と「運輸費」とは「その本性においてはまったく同一なのである」から、当面の考察にさいして「運輸費」にかんするこの叙述をとりあげていない氏の配慮は、まことに興味あることといわなければならない。

「労働の生産性と労働の価値創造とが逆比例する (Die Produktivität der Arbeit und ihre Wertschöpfung stehen in umgekehrten Verhältnisse.) といふことは、以前に明かにされたように、商品生産の一般的法則である。この法則は、他のあらゆる産業に妥当するのと同じく、運輸業にも妥当する」(『資本論』、インステイトウト版、第二巻、一四五ページ、訳、一九四ページ、傍点およびゴシック体—井田)。

このように氏の恣意的な引用のしかたは別としても、右の考察そのものがきわめて不十分なものといわなければならない。氏は、一方では、保管労働による価値形成、価値創造という事実を「疑問」とし、この表現が「行きすぎ」であるといつて価値生産を否定している。他方では、「保管費」が「商品の価値に『販売価格への一追加分』として価値を追加し価格を高める」といって価値の追加を承認している。いったい、保管のための

追加労働によつて価値は現実に生産されるのか生産されないのか、氏によつて追加を承認される「価値」は現実的価値なのか名目的価値にすぎないのか、これらの諸問題に答えていない氏のさきの「考察」が問題をすこしでも前進させるものでないことはあきらかであろう。追加される「価値」が現実的価値であるならば、当面、保管労働による価値生産を前提しなければならぬ。しかるに、氏はこのことを「疑問」とする。そして、氏はこの「疑問」を「社会的観点」なる「観点」によつて解決をこころみるのである。しかるに当面の問題は個別資本の問題として提起されており、また個別資本の問題として充分に解決されるのである。氏の「社会的観点」は、この問題について決して正しい解決を与えるものではないことを指摘しておく。

ところで、さきにみた原語の比較は別としても、さきの『要綱』にみられるつぎの説明——「あたかも直接的生産過程において、一層多くの必要労働が使用されるばあいと同じことである」という説明は、当面の考察に関連して看過しえないものをふくむものと考えられる。右の説明は、流通過程、すなわち保管過程における必要労働の充用は、直接的生産過程における必要労働のより多くの使用と同じであるといっている。ここでは氏が否定しようとする保管労働による価値生産、剰余価値生産が本来的生産過程におけると同じくきわめて明瞭に説明されている。このばあい、「同じである」という指摘は、氏の否定にもかかわらず、当面の考察にとつて意義深いものがあると考えられ

る。そして、氏の表現をかりれば、「この『要綱』にみられるマルクスの思想は、『資本論』の次の一節に発展しているように思われる」(橋本氏 前掲論文 一四ページ)。すなわち、「この流通費は、生産過程——といっても、流通においてのみつづけられる、つまりその生産的性格が流通形態によって隠蔽されているにすぎない、生産過程——から生じうる」(『資本論』、インステイトウト版、第二巻、一三二ページ、訳、一七七ページ)。このように、問題は原語の比較のみによって解決しうるものでないことはあきらかである。氏によるマルクスの叙述の数多くの引用は、氏の結論を正当化するものではなくむしろその誤りをしめす論拠としてのみ役立ちうるものと考えられる。

これまでの氏の見解の検討によってほぼあきらかなごとく、「通説」のもつ「疑問」を克服する課題も、保管過程を使用価値生産および価値生産の二面から分析し、それを通じて「保管費」の本性を正しくとらえる課題も、ともに適切にはたされたとはいえないようである。その良き意図にもかかわらず、氏がこのように問題点をふくむ結論をひきだすにいたった理由は、まず氏が、「保管費」と「本来の生産費用」との相違をあきらかにせんとする「意図」にとらわれすぎていたことによるものと考えられるのであるが、さらに、保管に関連して、「生産過程」の概念にかんする正しい理解の欠如がより大きな理由をなすといわなければならない。この点、第一節における安部氏の見解にたいする批判は同時に橋本氏の見解にたいする批判とも

なりうるものと考えられるのである。

以上をもつて橋本氏の見解の検討をおえ、前節における安部氏の見解の検討とともにこれらの成果を要約しつつ、そこにおいて指摘された「保管費」にかんする若干の問題点について、つぎに節をあらためて論究したいと思う。

三 「保管費」の本質

安部氏にとっては、「保管費用が、流通費用でありながら、生産費用であるのはいかなる根拠に基くのであるか」が問題であった。橋本氏にとっては、「保管費用の生産的性質は何によって説明されるべきであろうか」が問題であった。そして、このように提起された問題の解決は、これまでの検討によってほぼあきらかなごとく、いずれの論者によっても適切に与えられなかったようである。また、そこにみられた若干の混乱あるいは誤解は、いずれも、マルクスの「保管費」にかんする叙述をめぐって生じたこともすでに指摘したとおりである、そこでまず、このような混乱あるいは誤解を生じさせているマルクスの叙述を引用することにしよう。

「これから考察する流通費は本性を異にする。この流通費は、生産過程——といっても、流通においてのみつづけられる、つまりその生産的性格が流通形態によって隠蔽されているにすぎない、生産過程——から生じうる。それは他面、社会的に考察すれば、労働——生きた労働であれ、対象化された労働であれ——

の単なる費用・不生産的支出・でありうるが、それ故にこそ個別的資本家にとっては価値形成的に作用し、彼の商品の販売価格への追加分をなしうる。こうしたことは、この費用は生産部面が異なれば異なり、また、同じ生産部面内でも個別的資本が異なればしばしば異なる、ということからも生ずる。……だが、価値を追加する労働はすべて剰余価値をも追加しうるのであり、また、資本制的生産の基礎上ではつねに剰余価値を追加するのである。けだし、労働の形成する価値は労働それ自身の大きさに依存し、労働の形成する剰余価値は資本家が労働に支払う範囲に依存するからである。かくして、商品に使用価値を追加しないで商品を高価にする費用、つまり社会にとっては生産の空費に属する費用が、個別的資本家にとっては致富の源泉をなしうるのである」(『資本論』、インスチテュート版、第二巻、一三二ページ、訳、一七七ページ)。

一方では価値生産、剰余価値生産を認めながら同時に他方では不生産的支出であると説明している。一見、橋本氏を混乱させるにたる対立的説明と考えられるものがみられるようである。なによりも、「この流通費は、生産過程から生じうる」という命題の究明がなされなければならない。「この流通費」とはいうまでもなく「保管費」であり保管のための費用であるといっている。換言すれば、保管の生産的性格を理解しなければならぬ。かくして、問題は保管の概念が考察されなければならない

い。

『資本論』第二巻第一篇「資本の姿態変換とその循環」の説明によってあきらかなごとく、生産物は生産期間を経過することによって完成し、生産資本の形態から商品資本の形態に転化する。そして、この増殖された資本価値は商品資本としての機能、つまり自らを貨幣に転形し流通段階 $W'—G'$ を通過すること、この転形をはたすことになる。当面、保管とは、商品資本がこの $W'—G'$ の流通段階を経て、あるいは生産手段として生産的消費に入りこみあるいは消費手段として個人的消費に入りこむまでの市場における滞留、すなわち商品在庫について、生産物としての質の悪化を防止し量の減少を制限し、それによってその価値を維持することを本来の機能とするのである。保管と商品在庫として実存する生産物そのもののこの関係は、「保管費」の本質把握にとって決定的な意義をもっている。保管が生産的性格をもち、生産過程との関連において考察することを必要とするゆえんはこの点にあるものと考えられる。こうした保管の機能は、生産物の分量の増大、質の改善あるいは有用性におけるなんらかの変化等をもたらすものではない。そのかぎりにおいて、この保管過程は完成生産物の獲得にとって消極的な意義しかもちえないといわなければならない。しかし、保管の機能を通じて生産物が維持されなければ、生産物は生産物として実現されて消費過程において人間の慾望を充足させ社会的再生産を維持することはできない。したがって、保管は本来生

産物の生産そのものの諸契機の一つをなしているものと考えなければならぬ。換言すれば、商品在荷の保管は、一定量の完成生産物を獲得するために、本来的生産過程においてより多くの労働力および生産手段が充用されるべきと同じことであるといえる。以上のことは保管される商品在荷の形成の事情とは無関係である。すなわち、在荷そのものが一定の諸条件に規定されて商品形態の在荷として現象した商品在荷であろうと、商品が売れないために生じた商品在荷であろうと関係は依然として異ならないのである。ここで重要なことは、保管と生産物そのものとのこの関係、人間生活の社会的自然法則をなす「人間の慾望のための自然的なるものの取得」のなかにしめる保管の意義を正しくとらえることである。したがって、資本制の生産のもとでこの保管のために追加労働が充用されるならば、本来的生産過程と同じくこの追加労働による価値生産、剰余価値生産を認めることは当然のことといわなければならない。「商品の価値がここで維持または増殖されるのは、ただ、使用価値・生産物そのものが資本投下を要する一定の对象的諸条件のもとに移され、追加労働を使用価値に作用させる諸操作のもとに置かれるからに他ならない」(『資本論』、インステイトウト版、第二卷、一三三ページ、訳、一八〇ページ)というマルタスの叙述は、⁽¹⁾以上のごとく理解することによって正しく把握しうるものと考えられる。つまり「この流通費は、生産過程から生じうる」ということである。そして保管による生産物のこの維持は、生産

「保管費」について

物が一般的に商品形態をとる資本制的生産のもとでは、商品在荷の維持という特殊の現象形態をとるにいたるのである。だが、このことから保管と生産物とのこの本来の関係を看過して、それが資本制的生産の独自の性格から生ずる現象にすぎないと考えるならば、それは誤解といわなければならない。⁽²⁾

(1) 『資本論』の第六章「保管費」にさきだつ第五章「流通時間」のなかに、保管に関連したつぎのごとき説明がみられる。

「生産過程のための条件として準備されているにすぎない潜在的生産資本部分、たとえば紡績業における棉花・石炭などは、生産物形成者としても価値形成者としても作用しない。この部分は遊休資本である、といつてもその遊休は、生産過程の中断ない流れのための一条件をなすのだが。生産的在荷(潜在的資本)の貯蔵用に必要な建物や装置などは生産過程の条件であり、したがって、投下生産資本の成分をなす。それは、暫定的段階における生産的諸成分の保管所としての機能を果たす。この段階で労働過程が必要なかぎり原料などが高価になるが、それは生産的労働であつて剰余価値を形成する」(『資本論』、インステイトウト版、第二卷、一一七ページ、訳、一五九—一六〇ページ)。

生産在荷およびその保管は生産過程の条件をなし、したがって保管のための諸費用は生産資本そのものであることが指摘されている。保管手段は不変資本として機能し、労働過程に保管労働は生産的労働として価値生産、剰余価値生産をなすことは本来的生産過程におけると同じことである。

ところで、このように生産在荷として実存する在荷は、資本制

生産の発展につれて発展する社会的労働の生産力、運輸手段および信用制度等に条件づけられて商品在荷としての形態をとりうるにいたる。従来、その原材料を生産的に消費する産業資本家自身による生産在荷の保管の形態をとつていた在荷の保管は、他の自立的生産諸部面と相ならぶ特殊的な資本投下部面としてその資本を投下する資本家による商品在荷の保管の形態をとるにいたる。しかし、この姿態変換によつて保管に投じられた資本が生産資本としての機能をやめないことは、あたかも、商品在荷としての在荷が生産過程の条件としての機能をやめないことと同じである。保管による生産物の維持、したがつて保管の生産的性格は姿態をかえることによつて否定されるものではない。このように在荷の保管を産業資本家自身による生産在荷の保管として考察することにより、その本質が一そうあきらかにされうる手がかりをうるであらう。

さきに引用したマルクスの叙述は、生産在荷の保管とこの保管の生産的性格とについての叙述にとどまり、商品在荷一般の保管とその生産的性格との叙述ではない。したがつてこのことから、保管労働による価値生産、剰余価値生産を認め、「保管費」を生産過程から生じうる費用と規定することは、生産在荷の保管に限定されるべきであると考え、また、マルクス自身もそのように考えていると速断してはならない。すでに述べたとおり、それは誤解である。この誤解こそまさしく「保管費」そのものの研究を混乱させてきた主たる理由をなしていたことは、安部、橋本両氏の「保管費用」論がこれであきらかにしめている。

(2) この点について、さきに検討した橋本氏の論稿のなかのつぎの説明は納得しがたいものをふくんでいる。

「保管労働……が本来の生産過程の労働と異なるといことを主張せんとする本稿の意図は、本来ならば生産的労働の問題として、論ぜられるべき問題であらう」(橋本氏、前掲論文、一六ページ)。

氏は、ここで「生産的労働」の内容をあきらかにしていないが、もしそれが資本制の生産の立場から生ずる規定をなすものであれば誤りといわなければならない。資本制の生産の見地からみての生産的労働、したがつて、またそれに対立する不生産的労働は、社会的に規定された特定の内容をもつ労働、つまり労働力の売買の関係をふくむ労働の問題である。しかるに保管は、人間生産のすべての社会形態に共通せる、人間の慾望充足のための完成生産物の獲得そのもの労働過程の一契機をなすものと考えられなければならない。

以上の考察により保管が生産的性格をもち、価値形成的であることがあきらかになった。だが、この考察により同時に保管はすでに完成した生産物を量的・質的に維持するにとどまり、なら物質的富を生みだしえないことも、またあきらかにされた。たとえば、保管がきわめて有効適切におこなわれた結果、その在荷が保管過程に入りこんだ時と全く同一の質量をもつて生産的・個人的消費の過程において機能しうるばあいを想定してみよう。このばあい保管過程で機能した投下生産資本が、なら物質的富を生産していないことはあきらかであらう。それ

は、ただ、商品が在荷として市場滞留中に不可分な有害な自然諸力その他の影響を防止し、生産物を生産物として機能可能な状態に維持するための追加資本をなすにすぎない。生産物を維持することにより価値を維持するというこの追加資本の効果は、本来は労働過程における生きた労働の合目的な生産的活動そのものによってなんらの費用なしに獲得される効果であるにすぎない。しかも、追加資本として機能した保管のための生産手段の消耗部分および追加労働のための生活手段は、年々の社会的生産物から填補されなければならない。したがって、社会的労働の一定量は本来の生産過程からひきあげられ保管過程に固定されることになる。「保管費」が個別的資本家にとっては価値形成的に作用しつつもなお社会にとっては空費とされる理由はここにある⁽³⁾。

(3) 「保管費」が社会にとつては空費とされる理由を理解する手がかりとして、固定資本の維持にかんするつぎの説明を引用しよう。

「固定資本は特殊の維持費を要する。維持の一部は労働過程そのものによつて行われる、—固定資本は労働過程で機能していないと損傷するのだ。……労働過程における使用から生ずるこの維持は、生きた労働に具わる無償の天恵である。……労働は……生産過程における自己の行動によつて労働手段の使用価値を維持することにより、労働手段の価値を—これを生産物に移譲しないかぎり—維持する。」

「保管費」について

だが固定資本は、その整備のための積極的な労働支出をも必要とする。……この場合に問題なのは、それなくしては機械が使用不能となるような—生産過程と不可分な有害な自然力の影響を単に防禦するための、つまり文字どおりの意味で活動可能状態に維持するための—追加労働である。……ここで問題なのは……機械の使用が必要ならしめる絶えざる追加労働である。……この労働に投下される資本は、生産物を生み出す本来の労働過程には入りこまないが、流動資本に属する。この労働はたえず生産中に支出されねばならず、したがってまたこの労働の価値はたえず生産物の価値によつて填補されねばならぬ。この労働に投下される資本は、流動資本のうち一般的空費を支弁すべき……部分に属する」(『資本論』、インステイトウト版、第二巻、一六七—一六八ページ、長谷部訳、青木文庫版、第六分冊、二二二—二三ページ)。

したがって、社会にとっては、保管のための追加資本が社会的資本中にしめる相対的分量はできるだけ少ないことが要請されることになる。資本制の生産は、従来の生産諸様式のもとで各生産者の附随的業務として個々のに、分散しておこなわれた在荷の保管を、社会的分業によつて自立化し、したがって生産的資本の特殊の投下部分となすことにより商品在荷の保管としてその社会的な集中を実現するにいたつた。資本制の生産は、このように商品在荷の社会的集中を実現するかがり在荷形成によつて条件づけられる社会的空費の減少をもたらし、右の社会的要請にこたえるのである。「在荷が社会的に集中されれ

「保管費」について

ばされるほど、この費用は相対的に小さくなる」(『資本論』、インステイトウト版、第二巻、一三九ページ、訳、一八七ページ)からである。そしてさらに、このような空費の減少をもたらすことにより物質的富の生産に充用しうる対象化された形態および生きた形態における社会的労働の増大を生ぜしめ、社会的労働の生産力を発展させる。かくしてそれは、より高い生産関係の物質的諸条件をつくりだすのである。つまり資本制の生産は、歴史的にみれば、人民大衆を犠牲として物質的富そのものを強制的につくりだし、社会的労働の無限の生産力を強制的に発展させるための必然的な一通過点であるとすれば、当面それは、かくのごとき商品在荷の高度な社会的集中を実現するかぎりにおいてこの歴史的役割をはたすものといえることができる。

しかし、資本制の生産は、商品在荷の社会的集中によるこの空費の減少それ自体を社会的・計画的に実現しえないことはいうまでもない。この減少およびそれにもなう社会的労働の生産力の発展は、個別的資本家による剰余価値取得の一段としてもたらされうる結果に他ならない。社会的に考察すれば「保管費」が空費であるとしても、保管に資本を投ずる個別的資本家にとってはこのことはなんのかかわりもない。彼にとっては、製造業者が直接的生産過程で機械を生産するばあいと全く同じである。いずれのばあいもその投下資本は剰余価値の取得という本来の目的をたつしうるからである。しかも資本制の生産のもとでは、商品在荷の保管に投じられて直接的生産過程からひ

きあげられている資本および労働力の分量は、絶対的に増大することをよぎなくされている。そして、資本制の生産が発展すればするほどこの傾向は強化せざるをえない。資本制の生産の発展につれて、生産の規模は、生産物に対する直接的需要によつてはますます僅かな程度で規定され、個別的資本家の自由にする資本の範囲によつては、彼の資本の増殖衝動と生産過程の連続性および拡大の必要とによつては、ますます大きな程度で規定される。それとともに、どの特殊の生産部門でも、商品として市場にある・または販路を求める・生産物の分量が必然的に増大する。商品資本の形態で長かれ短かれ固定化される資本の分量が増大する。だから商品在荷が増大する」(『資本論』、インステイトウト版、第二巻、一三八ページ、訳、一八六ページ)からである。つまり商品在荷のうち売れない結果市場に滞留せざるをえない相対的分量が圧倒的な比重をしめ、したがってこの商品在荷の保管のための不生産的支出もまた増大することになるからである。さきに述べたごとく、資本制の生産が実現する商品在荷の社会的集中によるこの空費の減少およびそれによつて可能となる社会的労働の生産力の発展は、ここに資本制約生産そのもののうちにこえがたい制限を見いだすのである。すなわち、ここに資本制の生産様式そのものの矛盾があきらかにしめされているといえる。

このように物質的富を生産しない空費の増大をよぎなくされている資本制の生産にたいして、「社会全体のたえず増大して

いく物質的および文化的慾望の最大限の充足を保障すること」を本来の目的としている社会主義的生産のもとでは、この空費を最少限にすることが現実的課題をなすと同時に、このことを可能にする客観的諸条件が存在するのである。ソ同盟では、基本的な生産手段が社会化され国民経済の全分野で社会主義的所有が達成された結果、国民経済の計画的・均衡的發展の法則が社会主義の基本的経済法則に依拠して作用するにいたった。かくして、「ソヴェト商業は、社会主義的生産を国民の消費とむすびつけ」、商品の流通過程は国家的規模で計画化される。したがって流通時間は大いに短縮され、流通過程で機能する労働力と生産手段とはもっとも合理的に利用され、それによって「流通費」を最少限にすることが可能となるのである。このことを「保管費」についてみれば、商品在荷を在荷の商品形態に限定しうるにいたるといえる。つまりマルクスが、在荷と在荷の姿態変換の關係として叙述したように、「商品在荷として実存しないとすれば、生産在荷としてか消費元本として実存するはず」の商品在荷に制限する可能性が生ずるのである。このようにして節約された「保管費」は、物質的富の生産を増大するために充用されるのである。事実、ソ同盟では「保管費」をふくめて「流通費」のこの節約の実現につとめている。この点について『ソ同盟経済学教科書』はつぎのようにいつている。

「社会主義的計画経済制度の長所のおかげで、流通費の高さ、すなわち、商品取引額にたいする流通費の割合は、ソ同盟

では資本主義諸国のばあいの数分の一である。ソヴェト商業は、巨額の不生産的支出をまぬかれて……。……。

ソヴェト商業が発展するにつれて、流通費はますますひきまげられる。社会主義社会における流通費の引下げは、……社会的労働を節約する重要なみなものになる。流通費がきりつめられると、資金の用途を追加的にきりかえて、物質的生産……にあてることができるようになる」(『ソ同盟経済学教科書』、増補改訂版、邦訳、第四分冊、八七八―八七九ページ)。

(4) JI・マイゼンベルクは商品の回転についてソ同盟と資本主義諸国とを比較して、つぎのような数字をあげている。

「ソ同盟では第二次世界大戦前に商品の平均回転速度は三〇日以下であつたが、他方アメリカではそれは一九二九年に九六日、ドイツでは八三日であつた」(JI・マイゼンベルク著『ソ同盟国民経済における価格形成』、池田・平田訳、九九ページ)。

W—Gすなわち販売は、商品の姿態変換のうち最も困難な機能であり、したがって商品の流通時間のうち最も大きな部分を占めている。この数字によれば、商品の回転期間がアメリカはソ同盟の約三、二倍、ドイツは約二、八倍であるが、この相異は主としてこの「命がけの飛躍」に要する期間にもとづくものと考えられる。したがってこの相異は同時に、この期間中商品在荷として実存するために必要とされる「保管費」の相異をしめすものでもあるといえる。

(5) ソ同盟の在荷にたいしてここで商品という範疇がもちいられているのは、もつぱら、説明の関連にもとづいている。

「保管費」について

周知のごとく、労働生産物の商品への転化は、自立的な相互に独立した私的諸労働の諸生産物についての必要とする。ここにおける労働は、その自然的形態において直接に社会的な形態として意義をもつことはできない。しかるに他方、生産手段の社会的所有にもとずいて、社会の個人的諸労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出しうる社会主義的生産においては、この点において根本的に異なっている。自立的な相互に独立した私的諸労働による生産物の生産はありえないからである。つまりここにおける労働は、その自然的形態において直接に社会的性格をもっているのである。したがって、この自覚的に一つの社会的労働力として組織された労働の生産物が、私的諸労働の生産物が相互に商品として対応するばあいと同じ意味において、商品としての形態をとりえないことはあきらかである。したがって、範疇的には商品ではないというべきである。

(6) 「社会主義経済のきわめて大きな優越性は、商品在荷の量と社会的生産と国民の消費との実際の要求によつて制限できることである」(J・マイゼンベルク、前掲書、九八ページ)。

保管のための追加労働は、一方では具体的・有形的形態における労働力の支出であつて、この属性における保管労働は生産物の維持という一定の有利的効果として表示される。それは、他方では人間の労働力の支出であつて、この属性における保管労働は生みだされた一定の有利的効果の価値対象性として表示されることはすでにみたとおりである。では、このように保管労働が生産した価値および生産手段の消耗価値部分つまり在

荷形成の費用は、すべて商品価値に附加され実現されるのであるか？ このことをあきらかにするためには、まず、在荷とその形態との関連を考察しなければならない。このことはすでに生産在荷について在荷の形態変換として特殊に述べた(第三節の註(1)参照)が、あらためて一般的にふれることにしよう。

マルクスによれば、在荷は生産資本の形態、個人的消費資本の形態および商品資本の形態に商品在荷として同時に三つの形態で実存し、それらは相互に制約関係におかれている。すなわち、ある形態の在荷の減少は他の形態の在荷の増大をもたらすという在荷の形態変換の関係が一般的にみられる。このことはすでに述べた生産在荷に限定されるものではなく個人的消費資本についても妥当する。たとえば、生産が直接に自己需要の充足のためにおこなわれた農民経済をみればあきらかなごとく、その生産物の大部分は商品在荷としてではなく生産在荷および個人的消費資本として生産者、消費者自身の手中にある。しかし、資本制的生産が発展して生産物の商品形態が一般的となるにつれて、生産物の範囲は同等であつても、これらの在荷は商品在荷の形態をとりうるにいたる。このことは、資本制的生産が発展して直接的生産者の圧倒的多数が賃労働者に転化するにいたれば、その消費手段は商品として生産され商品在荷として市場にある生産物部分によつて提供されなければならないことからしてもあきらかであろう。ここでは、さきのばあいとは逆に、

消費手段の大部分は商品在荷として資本制的生産者あるいは商人の手中にある。これは、生産在荷のばあいと同じく在荷の姿態変換に他ならない。このように、商品在荷が在荷の商品形態であり資本制的生産のもとで生産在荷および個人的消費元本がとる特殊的現象形態に他ならないばあいには、この在荷形成の費用は追加価値として商品価値に附加され実現されるのである。⁽⁷⁾

(7) このことについてマルクスはつぎのようにいつている。

「商品在荷が、在荷——これは、与えられた社会的生産段階では、商品在荷として実存しないとするば、生産在荷（潜在的生産資本）としてか消費元本（消費手段の予備）として実存するはず——の商品形態に他ならぬかぎりでは、在荷の維持に要する費用つまり在荷形成の費用、すなわちそれに費される対象化された労働または生きた労働は、社会的生産元本なり社会的消費元本なりの維持費の転化したものに他ならない。この費用から生ずる商品価値の増大は、この費用を相異なる諸商品の上に按分比例的に配分するのである……」〔資本論、インスไตットウト版、第二巻、一四二ページ、訳、一九〇——一九一ページ〕。

だが、商品在荷は右のような在荷の商品形態に他ならない諸成分からのみなりたつものではない。すでにしばしば述べたごとく、資本制的生産の独自の性格から生ずる商品在荷の実存をも認めないわけにはいかない。資本制的生産は剰余価値生産を規定的動機とする生産様式であつて、生産物にたいする直接的

「保管費」について

需要によつて規定されるものではなく、したがつて商品在荷は商品が売れない結果増大せざるをえないからである。このばあいの在荷形成の費用は、追加価値として商品価値に附加され実現されることはできない。その資本家自身の個人的負担となるのである。⁽⁸⁾

(8) このことについてマルクスはつぎのようにいつている。

「資本家が、生産手段および労働力に投下した資本を、生産物……に転形したが、これが売れないで貯蔵される場合には、……この在荷の維持に……必要な支出は積極的損失をなす。もし彼が、私の商品は六ヶ月間も売れなかつたので、X額の空費を要したと云うならば、最終購買者は彼を笑殺するであらう。……その対象が商品形態で固定するために彼が要する空費は彼の個人的冒險に属するのであつて、この冒險は商品購買者には何のかかわりもない。……」

……こうした場合、商品在荷は、……商品が売れないことの結果である。費用は同じであるが、それはいまや純粹に形態から——すなわち商品を貨幣に転形する必要があるから、およびこの姿態変換の困難から——生ずるのであるから、商品の価値には入りこまないで、価値実現における控除・価値損失をなす」〔資本論、インスไตットウト版、第二巻、一三九——一四二ページ、訳、一八七——一九一ページ〕。

この引用にみられる「価値実現における控除をなす」という説明について、簡単につぎのことを附言しておこう。周知のごとく、価値実現とは価値生産を前提し、そこで生産されて生産物の対象

「保管費」について

一九二

的属性として実存する価値が現実には貨幣に転形することを意味する。したがつて、「価値実現における控除」とは、この対象化した価値の可除部分が現実には貨幣に転形しないことをしめす表現に他ならない。つまり「保管費」を投じた個別的資本家にとつての個別的価値として生産された価値も、社会的必要をこえる商品在庫の保管にあたつて生産され、したがつて商品価値のうちこの社会的平均をこえる在庫の価値として実在する価値部分は、現実には貨幣に転形することはできない。だがこのことから価値生産そのものを否定するならば、それはいうまでもなく誤りである。個別的価値という概念そのものがこのことをしめしているといえよう。保管労働による「価値創造」を「行きすぎ」と称する論者の見解が支持されたいことは、この点からみてもあきらかであると考えられる。

x x x

「保管費」の考察においては、すくなくとも重要な論点が三つ指摘されなければならないと考えられる。第一は、「流通費」としての「保管費」が生産過程から生じうる費用である、という命題である。第二は、「保管費」が、右の命題にもかかわらず、社会にとっては不生産的支出であり、生産の空費に属する費用である、という命題である。第三は、「保管費」がどの程度まで商品価値に入りこみまたどの程度入りこまないか、この価値実現を規定する契機の問題である。

そしてこれら諸命題および問題は相互に無関係になりたつとも

のではなく互いに密接な関連のもとにおかれており、第一の命題の正しい解決は以下の命題および問題の解決の条件をなすものと考えられる。換言すれば、第一の命題の理解なしには第二、第三の命題および問題の理解は不可能となり、ひいては「保管費」の考察そのものが不十分なものとならざるをえない。この小論においてわたくしがとくに意を用いた点はここにあった。安部、橋本両氏の見解の検討も主としてこの視角からなされた。さらに、「流通費」における「保管費」の独自性は、この第一の命題の理解にかかっているともいうことができる。この点は、「保管費」について考察されるべき「運輸費」の本質との対比によっていっそうあきらかにされるものと考えられる。この「運輸費」についての考察は次稿の課題をなす。

(一九六〇、八、三)